

地域。パルチザン批判

ノンセクトラジカルズからラジカルズへ

滝田修

この報告は、パルチザン組合議の合宿、大阪根拠地・5地区反戦の合宿、8・7大村闘争の合宿、等々の報告と討論を踏えたかたちで、去る8月13日、電信労働者（大阪）諸兄弟の会合で行なったものであり、この間、我々が主に追求しつつある問題意識——あるいは方向感覚——を概略的に提起したものである。

とにかく、こういうことです。自由「について」色々解釈し、それ「について」語ることは大いに結構だけれど、自由「そのもの」を存在たらしめること、自由にふるまうこと、ガタガタいわずに黙って自由「を」生きることに、これは絶対に許さない、このように秩序・権力は考えている。なぜなら、秩序は非自由であり、反自由であり、したがって自由を恐怖しているのだから……。最近の映画『イーシー・ライダー』の中のあるシーンで、ジャック・ニコルソンは、ほぼこうした意味のことを語るのですが、今日、わたしが報告したいと思っ

いることも、そのモチーフについていうなら、結局のところ、こういうことなんです。

つまり、共産主義「について」語るのもいいだろう、暴力「について」の解釈もいいたろう、それは、インテリたらしい「いいひとたち」がやってくればいたらエエのです、そやけど、ホンマに暴力をやり共産主義を準備し始めることは絶対に許さんちゅうわけです。だからこそ、奴らにとっても、我々にとっても、全く逆の立場からですが、問題になるのは、「ナニナニについて」の「解釈」ではなくて、「そのもの」の「変革」なんです。こういう具合に考えると、実際の話、「ことば」の、いわゆる左翼言辞の空無性・幻想性を感じないわけにはゆきません。理論の無力感です。ナニナニについていうたら、もうそれでアカンのです。いうたら呑み込まれるのです。いい合いの世界——そういう媒介的世界があるんです、そういう世界に呑み込まれてチョンなのです。いうたらアカンにもかかわらず、いわなアカン

し、また現にこうして、またしても、いま、いいつつあるのです。「わかつてても」やめられない業のような奴をひしひしと感じるわけです。どうしようもない理論信仰と論争という名のお喋り、そしてこれまたどうしようもない実践の圧倒的立ち遅れ。問題はこうした体質やと思うとるんです。実践的経験を集中し累積し系統化し、かつその中から学ぶ術に、我々が如何に欠けているか、このことに深く思いをいたさんとアカンのです。

前置きの前置きはこれぐらいにして、我々は、本題に入る前に、ホンマの前置きを次の三点にわたって確認することから始めたいと思うのです。

第一の確認は、革命戦争の必然性と革命派勝利の確信について、みずから深く固く確かめる必要があるということです。革命戦争は、「かつて在り、いま在り、こんごも在る」のだということ、秩序は砂上の楼閣であり、「あすにも革命は物の具の音をとどろかせてふたたび立ち上る」のだということ、そして革命派が必ず勝つのだということ、このことの確認である。あたりまえのことやんか、というかも知れませんが、いいたければいえ。あたりまえのことから確認せんとアカンののだ。あたりまえのことをこそ確認せんとアカンののだ。アホみたいなことを確かめることから始め、つねにつねにそれをせんとアカンののだ。結局、アホみたいな、わかり切った、あたりまえのことの確認がホンマの意味ではできてへんことに問題があるのだ。真理はアホみたいな単純明解なことがらだし、それに身を委ねる奴は、やっぱりアホみたいな奴だから。

第二の確認は、現在、一切の手掛りを失なったという意味で、六〇

年代のいかなる時代にも経験しなかったような、未曾有の時代が始まっているのだということ、だからして当然のことだが、過去の理論と経験から自然成長的に「現在」を規定してはいけないのだということである。このことを現実的・具体的に実感するリアリズムを身につけなければならんし、また同時にこうした短いタームでの現実的実感が、実はより根源的には、世界帝国主義と反帝闘争の質的世界史的転換に規定されていること、このことを知る必要があるだろうということです。

そして第三に、我々は、みずからの中に執拗に生き続けている青年ヘーゲル派的体質を克服する必要があるということを確認せねばならんと思うのです。旧新左翼に限らず、日本共産主義運動総体の思想宣伝運動II啓蒙派社会主義の水準を突破せんとアカンののだ。一つの行動をやり切るのに一〇〇の理屈をコカんとできないようでは、どうにもならんではないか。すでに前置きの前置きで示唆したように、これではアカンののだ。全組織を敵の手中に握られて一切の動きを管理されているところの「理論としての党」が軍団についての談義をしたからといって、どうということはないのだ。理論としての党の、理くつのみを媒介にした一枚岩的・垂直的・官僚的団結で軍事的団結に結実するはずがないではないか。理論的団結の先行性は平時の組織の特徴であって、これでは迫り来る戦時の必要に耐えられるわけがない。未来の必要から現在を規定するのが、我々の方法であるとするなら、まずもって軍事的部隊的団結の獲得が軸であることを知らなければいけない。軍事的部隊的団結——当然非合法だ——が党的団結を獲得するとういう具合に逆転しないと、ものごととは一歩すら前にゆかないであろう。党

が軍団をつくるというのは、革命の自然に反するのだ。逆倒しているのだ。もっとはつきりと、誤解を恐れずに現下の日本の左派の左派的解体のためにいうなら、一にも二にも軍であって、ヘリクツは後である。ヘリクツで組織をデカクしてそれを軍団だとかなんだとかいうのは現代に於ける第二インター主義である。そして大切なことは、こうした不真面目な潮流を粉砕するためには、——歴史はきれいごとを許さないのであって、いわゆる軍事一点張りのリアクションがなければ、こうしたリアクションが我々青年の手によって成し遂げられなければアカンのだということを確認したいと思うのです。

以上の三点を確認したうえで、我々はどのような具合に考えるのかというところを、つまり本論の報告をはじめたいと思います。

基本的な内容は、そういう未曾有の新しい時代が始まりつつあるということ、絶対に我々は勝つんだということ、そして、その為には我々自身が新しい心構えで新しい時代に入らねばアカンということ、そうするとき、邪魔になるのは、左翼の伝統的迷信——理論と実践における伝統的な機構を粉砕しなければならん、それを私の問題から言わしめてもらえば、これは、ノンセクトラジカルズからラジカルズへということであり、謂ゆるパルチザンならず者運動の深化と拡大の中でその止場を勝ち取っていかねばならん、ということ。パルチザンは全園にいるけれども、何としても、もう一度解体し、質的に高めねば、どうにもならんという処まで来ています。その我々の組織的な解体、我々自身の我が解体を勝ち取り、新しく七〇年代には、真の革命派を登場させる為には、我々はマルクス主義の伝統的迷信を打倒しなければならんと思います。その観点から、二、三どうしても手をつけなければ

れ、定められたその原理で労働者階級を組織した時代であった。労働者「階級」というのは、マルクスの時代から居つたように、常識的に思われているが、そういうものでは全然なくて、政治的転換期において、フォード・システムが登場し、そして新しく量的な形で単純労働が工場過程に導入される段階に至って、やっと労働者「階級」が登場してくるわけだが、これを組織的に共産主義の原理で組織したのが、明らかに第二インターであった。従ってその観点から比喩的に言うなら、我々の六〇年代闘争は、明らかに、六〇年代安保闘争によって確定された世界革命派なるものが、それ自体の部隊を形成していく、そういう第二インター的な歩みであったし、それがまさしく反帝派に対する反スタ派の勝利として結果したのも自然の成りゆきであったと思えます。そして第二インターというものが、世界共産主義運動の中で、戦争と革命の時代への突入であったように、我々の七〇年代安保から後の七〇年代闘争というのは、我々日本における世界革命派の戦争と革命の時代であると考えなければならないのです。では、六〇年代安保の時に確定した我々の原理は何であったかと振り返ってみると、これが謂ゆる反スターリン主義であった。反スターリン主義というのは、代々木の一枚岩的な官僚主義に反発して、大衆一人一人が——この一人一人という処が大事な点——一人一人の意欲と創造性・自発性・闘性を解放したという点に、反スタ運動の最大の意味があった。何じやかんじやという点も、六〇年代安保時の代々木共産党スターリニストの一枚岩的な官僚主義に反発して大衆一人一人の戦闘力と創造性とそして創造性を解放したという点に最大の意味があったと思う。そしてその軸は、組織的政治的には、日共との党派闘争であった。また、理論

ばならん点について今日は報告したいと思います。

第一点は、反スターリン路線は止揚されねばならんということであり、第二点は、謂ゆるグローバルイズムというか、世界革命「主義」みたいなものが我々新左翼の中では常識的になっていくけれども、この世界革命「主義」について実際に疑問を投げかけねばならない段階に入ったという事であり、第三点には、現代資本主義の矛盾がどういふふうに見えるのかという観点から、日本の現代帝国主義の問題に迫る必要があるということ、そして第四点に、全体の総括として、世界革命を基本的なモチーフとした我々のアジア革命というのは、どういう風にして達成されるのか、またその為には、その日本の階級関係、階級情勢はどのように推移するのか、を報告したい。

先ず最初に、マルクス主義、トロツキズムの伝統的迷信を粉砕しなければならんといったことは、反スターリン主義の問題です。先に述べたように、我々は六〇年代にどうであったかという点、六〇年代安保闘争というのは、我々にとり第一インターであると先ず、位置付ける必要がある。新左翼というか、日本において新しい世界革命派が量的に大衆的に党派的に登場する段階が、六〇年代であると私は考える。何故第一インターなのか。世界共産主義運動の中で、第一インターはマルクスとバクーニンの闘争で開かれたが、その創設と活動は基本的には共産主義運動の原則原理を確定する活動であった。そういう意味で、我々の日本における世界革命派は、六〇年代初期、つまり六〇年代安保闘争によって勝ち取られたと思います。第二インターの時代は、六〇年代の十年間であるが、何故第二インターだったのか。第二インターというものは、世界共産主義運動の中で、第一インターで確定さ

るには一國革命ではなくて世界革命である二段階民々革命でなくて永続革命であるという事が結集軸であった。そういうふうな、組織的理論的には結集軸をもちながら、要するに我々は反スタなのだというのが、我々の先進的労働者学生の最大公約数・合言葉だったと思えます。問題は、矢張り、我々は一國二段階革命ではなくて世界革命だと思っている。この点は、理論的には六〇年代段階で、その手がかり・指導的方法を確定した。しかし残念ながら、我々は既に日共との党派闘争が問題にならぬ段階に位置している。事態は深刻化して、既にそういう状態ではなくなっていると現在思われます。現在明らかに問題になっているのは、そういう大衆一人一人の自発性と闘闘性、そして混乱し沸とうする戦闘的力量というものを、しめつけ、それでもって、一枚岩的な官僚主義的な枠組を与え、更にその組織防衛に当りつつあるのは、日本共産党のみならず、革共同両派がそうであり、我々は革共同両派に対して、明確なイデオロギー戦争、イデオロギー的の段階決戦を挑まなければ、日本の七〇年代は絶対に我々のものにならないと思うのです。その視点から言えば、我々は六〇年代に獲得した世界永続革命の原理を踏み台にしながら、それを政治的思想的な方向性としながらも、第二インターの段階——六〇年代闘争において、結集し我々が獲得し集中した処の部隊をバネにし、六〇年代の戦争と革命の時代に突入すべく新しい党派性・思想闘争・理論闘争を挑んでいかねばならないと思うし、結局は革共同両派が七〇年代の十年間を勝利しきつたということ卒直に認め、これを打倒し、これと敵対し、これを圧倒し切るという方向に、我々が政治的の照準を合わしていかなければならん。我々はとり返しにつかぬことにはないか。革共同の

反スタ主義を、我々は明確に歴史の中にはめ込む必要がある。何故なら、第二インターの時代は七〇年代には終っているからだ。六〇年代第二インター時代というのは、現在既に歴史的にもその命脈を絶たれて、既にその任務を終っているからだ。反帝を打倒し反スタとして勝利していった革共同を政治的に思想的に破算に追い込まない限り、革命と戦争の七〇年代を絶対に迎えないことはできない。我々新左翼の中の最大の迷信の一つに反スタ主義なるものがある。反スタ主義、なるほど結構、結構だが、反スタ主義を唱えながら、否、反スタ主義を唱えることになって、一枚岩になり官僚主義になり、そして指導と大衆の関係を圧倒的に固定していくのが、革共同なのだ。そして、大衆と指導との関係が固定するというのは明らかにスターリン主義の基本的政治的構造であり、組織的構造ではないか!! こういう構造で、どうして人間一人一人の全人格を賭けて闘う革命戦争の時代に我々が突入することが出来るのか、絶対に出来ない。我々が革命戦争の時代に突入するということは、そういう指導と大衆の間の固定性を破壊し、指導が指導され、上が下になり、下が上になるという、構造の混乱をバネにしなければ、新しい七〇年代を我々は絶対に手にすることが出来ない。したがってその意味から、我々先進的な青年にとって一番ガンとなる、最も打倒しなければならぬスターリン主義組織とは、明らかに革共同両派であるという事を、政治的に思想的に理論的に、紙の上でも、言葉でも、至る処で言って廻らんとエライことになるといふ事を確認しなければ絶対にあかん。——あんまり、これ確認するとですね、こないだの教育大学みたいに、トンカチもつてきて「やったっかんね」でやられそうになるからネ、向うは強いしネ、大

りわけ共産同の生成・発展・消滅の過程とその理論的成果を追求しなければならぬし、また、マオイズムの思想的政治的研究とアジア革命における中共政権の評価をめぐって自らの方向性を模索する必要性がある。言う迄もなく、毛沢東とその政治は既に日共に迎えられた第一期の流入期を終え、一〇・八以後の第二期の流入過程を終えようとしている。毛沢東の中共と、その政治主張は我々日本の左派の独自の政治的戦略的努力によって、全く新しい形で批判的に摂取されなければならぬ局面に入ったからである。

第二点に、我々は、国際主義の問題について報告しなければならぬと思えます。何故かといへば、同じことなんだが、分けていうなら、次の二つの視点が挙げられるであらう。

一つは、我々の国際主義というのは、要するに、「世界革命」という抽象的「理論的」な絵であった。我々の時代が、本当に、戦争と革命という、日本の世直しに関わる時代でなかったら、それでよい。色色な「世界革命」の談話をやるとればよいのだ。しかし、現在我々は六〇年代とは決定的に違っていて、戦争と革命とをこの手に握りかけているのではないか。どうするんや。我々の内にある一種のグローバリズム世界「主義」は、絶対に克服せんとアカン!! もつとリアルに国境を越えることを考え、そして始めなければならぬ。言う迄もなく、日本は一国革命ではダメなのだ。勝てるはずがない。韓国も、沖縄も、マラッカ海峡に至る迄、フィリピンでも、マラヤでも、インドシナでも一挙に、或いは可及的速かに同時的に全面的に武装闘争に入っていくことが勝利の条件やないか。而も、こうした多くの第三世界の国々はアジア反革命の心臓部II日本帝国主義への間接侵略を準備せんと、我

体エエモンが弱うて悪いモンが強い構造になつとんのんでね、あんまりいうとまた捕って、「オマエ、トンカチや」いうてバインとどつかれるからね、困るんやけど、どつかれても何しても、これは言われへんことにはどないもならん。だいたいね、始めっから真白なヘルメットかぶって官憲ににぶつかっていくというのはようないね、始めっから白旗ふつて出て行った奴が十年間デカイ顔してたという事自体おかしな話や。七〇年代には、これを自覚しないと、ほんまにエライことになるで、ホンマニ、——その際、我々が政治的に理論的に進めたいかねばならない事を次の三点で整理すると、黒田寛一の政治哲学に対する徹底的な破算宣言を理論的にやり切る必要がある、これが第一点。第二に、我々は革共同の反スタを次の視点から問題にする必要がある。即ち、戦後の階級闘争の攻防戦の総体の中に、六〇年代第二インター時代を位置付けて把握することだ。これが、我々の進み得る一つの方向性だと思えます。これが革共同の反スタ主義に足元をすくわれないうで、理論的に勝利する一つの重大な、手がかりだというふうに思えます。だから、奴らが、何をいうとるかということに「批判的に」勉強する必要は全然ないのだ。その際、我々が、特に注意して検討せねばならないのは、一五〇年代初頭の日共の武装革命路線に対する総括、二五五年段階における戦後日本の政治的経済的社会的構造の変化に対する総括、三六〇年安保、四六〇年代後半に於ける日韓、ベトナム実力闘争の分析、五六九年から七〇年安保闘争の問題性であります。ほば、五年チームで、その質を変えて来た日本階級闘争の攻防戦の中に、革共同の反スタ主義を、既に歴史的任務が終ったものとして、「はめ込ま」なくてはならぬのだ。更にこうした検討の中で、と

々の革命は勝利することは出来ない。世界革命、結構だ。国境を越える革命でなかったら、革命でない事は、自明ではないか。日本一國の革命なんか、一発や、包囲されてバンバン来て、一発ですよ。中央権力闘争で国会を占拠しても、東京をやっつけても、首都は何も東京でなけりゃならんことではないのであって、ナハでも、ソウルでも、タイホクでも、ここが日本の首都だと言えはエエではないか。沖縄へ逃げて、韓国へ逃げて、台湾へ逃げて、ダメだという事にならんとあかん。逃げ場がない様にならんとアカンのだ。実際、ベトナム・ラオス・カンボジャを頂点とした、アジア第三世界には、奴らは逃げていけへんやんか!! 可及的速かに、同時的波状的に、雪崩を打って国境を越える革命戦争に、そやから、突入しなければならぬのだ。それは我々の革命の利益に関わる問題である。だとすれば、我々が何が何でも、世界革命を基本的モチーフにし、国境を越える革命のココロで、円ブロックの、つまり、朝鮮半島からマラッカ海峡に至る迄の、革命と反革命の戦略を具体的に追求しなければならぬ。もしそうしなかつたら、我々は、嘘つきやないか。これが第一の視点である。

第二の視点は何か。我々が執拗に去年の六・八大村II川奈同時蜂起闘争から主張していることなんだが、七〇年代闘争は、国際主義と民族主義の死闘の時代だ、ということだった。そういう七〇年代が、現在、何として始まっているかといえ、入管闘争として始まっている。ところが、国際主義というのは、わが第一インターであった奴の六〇年代安保闘争で確定した政治原理やないか。それ以上に、一歩でも出たか。それ以上に出ようとする何らかの準備を、我々はやっているのか。やっていないではないか。相も変らず、入管闘争でやられているのは、

残念ながら国際主義の宣伝運動だ。民族主義よりも、国際主義の方がエニヤという話だ。何故エニヤ。入管闘争でカンパニアをガンガンやり、デモってみても、同じ時、一方では在日朝鮮人の青年諸君が、「日本人」に殴られて、半殺しの目に会っているのではないか。これを放つとして、入管問題で集会をやり、国際主義の解釈学をめぐって討論し、何をしようか。敵の国際主義はアジア反革命共榮圏構想という形で、政治的経済的イデオロギー的に、そして軍事的にも既に進行しているのではないか。にも拘らず、この期に及んでもなお我々は、六〇年第一インターの水準に甘んじ、国際主義イデオロギー宣伝運動を繰り返しているのだ。こういうものに入管闘争がへし曲られているのを我々は絶対に喰い止める必要があるという事を確認したい。では、どうなるちゅうのんや。

我々はかつて一〇・八以後の過程で、国際主義と組織された暴力という事をいつてきた。これは、理論的によく考えていくと、正しくなかったばかりか、我々の体質をいみじくも表現していたのである。ぶっちゃけて言えば、国際主義が政治的思想的な質をもったものが、暴力を組織すると言ったのだ。国際主義の質で組織するとは、何ということと言うのか。ちがうのだ。国際主義というのは暴力なのだ。逆は必ずしも真ではないが、国際主義は即暴力である。暴力のない国際主義なんか何処にある。国際主義というのは、ブルジョアジーを見てみる、戦争だ。奴らの国際主義の究極的かつ根源的な形態は、世界戦争、世界征覇だ。奴らも「全世界を獲得する為に」と思っているのだ。奴らの国際主義は、国際侵略主義であり、民族主義は、民族抑圧主義なんだ。それは、暴力に、戦争に、究極的な実現形態を見出す。

位を客観的に保証された在日朝鮮人が、どうして信用するであろうか。軍事力量の形成を抜きにして、在日朝鮮人にどないして義理が立つと言うんや。絶対に立たない。我々に、国際主義的軍事力量がないから、在日朝鮮人が、半殺しの目にあっているのを、座視しているのだ。在日朝鮮人を暴力的に迫害する「日本人」住民・右翼に対して、我々日本人が暴力的に敵対し、在日朝鮮人を防衛することが、つまり言い換えるなら、日本人と日本人との暴力的対決によって日の丸国家秩序を揺さぶることが、そうした暴力へと深化することが、国際主義軍事力量の形成の一步とちがうのか。

在日朝鮮人は、我々日本人と質的にちがった二重三重の抑圧と搾取を受け、偏見の対象となっている。敵はみずから日の丸国家秩序を支えるために、一億のブルジョア支配秩序を支えるために、六〇万在日朝鮮人の「存在」を必要としているのだ。日の丸国家秩序を幻想的に総括し支え切るために、日の丸国家秩序外秩序の存在を必要としているのだ。だから、もつとハッキリいうなら、彼ら在日朝鮮人が何をしようか、どのように生きておろうと、ブルジョア権力にとっては、それが第一義的に問題になるのではなくて、価値的にベケだという存在として存在していかればいいのだ。日の丸国家秩序外秩序が存在していかればいいのだ。そうすると問題の核心は何かかという和在日朝鮮人が、みずからの手で、みずからの存在、つまり日の丸国家秩序外秩序としての在日朝鮮人存在を解体することだ。総連・民団を頂点とするところの、在日朝鮮人に関わる伝統的な諸機構に対する造反有理型の解体闘争、これが、追求されなければならぬ。みずからの既存の政治的組織形態が、その中に反対物を含むことによって、流動

我々は、少なくとも、ブルジョアジーを鏡として自らの姿を写すべを身につけなければならぬ。我々にとっては奴らと同様、国際主義は、国境を越える国際主義のココロは戦争ではないか、間接侵略でしょ、戦争なのだ、軍隊なのだ。国際主義というのは組織された暴力即ち軍隊なのだ。何か同盟があつて、国際主義の質をもった賢い人がはつて、そいつらが暴力を組織するという、濡れ手に粟のような変な話とは違うのだ。先ず暴力があつて、先ず軍隊があつて、これがやるというのが国際主義である。違うんか。最初に触れたイージー・ライダーのココロは、このことである。自由について語るのは勝手や、誰でも許してくれる。国際主義について語るのは何ほでもエニエ、頭の中で国境を越えるのだったら、何ほでも越えはつたらよろしやないか。しかし、ハイジャックではなまに国境を越えたらアカンという訳や。

……国際主義というのは、宣伝運動でもなければ思想運動でもない。この程度のことを今になって確認しなければならぬのは、我々を含む日本の左翼総体のインポテンツを語って余りある。黙って軍隊を作ることに、これを考えなければならぬ、そういう時期が現在なんだ。秋以降は、闘争の軸は、入管以外にはないだろう。あと、地域闘争、公害闘争、基地闘争などが系統化されず散在したまま、ずるずるとからまつていくというのが、当面する秋以降の感じだ。そして、一方では、地域闘争、公害闘争、基地闘争等々は、例のカビ臭いソビエト運動主義の迷信に捉えられたまま、深化と突出の回路から右へ右へと外れていくであろうし、また他方では、軸となるべき入管闘争を、おなじみの理論家が談議のネタにし、国際主義のココロからハジかれていくであろう。軍事力量から疎外された国際主義を、その審判者たるべき地

し、解体されなければならぬ。これが、彼らの闘いの基本であるだろう。根拠は単純だ。在日朝鮮人を伝統的に総括していた政治的組織形態を通して、奴らブルジョアジー権力・「日本」権力は、彼らを管理し、抑圧し、侮蔑してきたからなんだ。だから、彼ら在日朝鮮人に関わる政治的組織形態は、否、一切の彼らの機構(秩序)は、そのまま同時に、奴らブルジョアジー「日本」権力の、支配のためのパイプであることに深く心をいたさなくちゃならぬ。パイプ、敵のパイプは、断ち切れねばならぬ。パイプを断ち切るといことは、在日朝鮮人の秩序が、即目的にも、対象的にも、わけがわからなくなるといことであり、それが最早日の丸国家秩序外秩序であることをやめるといことなのだ。奴らブルジョアジー「日本」権力は、こうした事態を最も恐れ、しかも早くもそれを察知して、それを封ずるために、入管法を準備し、再登録を強要しているのだ。環はパイプだ。パイプは断ち切れねばならぬのだ。これは、彼ら在日朝鮮人の青年革命派に「固有の」「独自の」「任務であるだろう。他方、我々日本人の革命派は、すでにいかに強調してきたように、日本人と日本人の暴力的対決を作り出すことによつて一億の日の丸国家秩序を混乱の極におとし込み、わけがわからぬなりふりかまわぬ状況を持続的につくり出し、よつてもつて、在日朝鮮人青年革命派の諸君の努力と等質化していくことであつて、安易かつ浮薄にも「共闘」を語ることではないのだ。一般に、闘争の成熟というものは、別個に進んで別個に撃ち、別個に進んで共に撃つようになり、そしてこうした営為の集中と蓄積を経てやっと、共に進んで共に撃つようになるのであつて、傲慢にもこの過程を一挙にやれるなどと思わない方が身のためであろう。そうしたスケ

べなことを考えるから、日本の左翼は駄目なのだ。それでは在日朝鮮人の諸君に義理がたたんだ。

第三に、我々は、帝国主義段階の資本主義矛盾の姿態転換について——実はこの点は、六月二一日号の『朝日ジャーナル』誌上で論考したことなんだが——この点について、報告し、日本資本主義の現在の生き様についてリアルな認識をあらためてもつ必要があるのだということをお話ししたいと思う。かつて池田内閣の所得倍増計画Ⅱ高度成長政策の段階でも、単に日本のみならず世界的な規模で、資本主義は変わった「いや、変わってはいかないのだ」とかいった議論が、極めて結構なバラ色の議論がもてはやされた。それは主に、資本主義の「修正」の可能性を問うような仕方設定されていたので、我々の陣営も、そのあたりをくって、「疎外革命か搾取革命か」といった、極めて低次元の論争が流行したのであった。而し、あらたな論争は未だ始

つてはいないけれど、帝国主義段階の資本主義矛盾の姿態転換に関わる論争が、我々の手によって、始められなければならない。それは、資本主義の「いざぎま」についての理解に関わっているからである。具体的な話をすれば、伝統的なマルクス主義の賃金論は最早役に立たなくなっている。つまり、賃金は労働力価値の価格表現だということでは絶対的に不十分であって、資本と賃労働の攻防関係を把握することとは出来ない。むしろ、はつきりと、リアルに見るならば、賃金は労働力の価値を軸にしながらも、より基本的には、企業に対する貢献度によって、決定されているのではないか。Z・D・Q・C・システム管理を導入した形で労働管理と職務給賃金体系の存在と機能は、「ほんとうは労働力の価値が賃金を決定するのだが……」といった言い逃れの

賃金論に事実上の破算を宣告している。だからこそもつとはつきりとリアリズムで云おうではないか、賃金は、企業貢献度によって、つまり労働者に対する勤務評定によって、決定されているのだ、と。要するに、資本家が搾取しているのは、労働者の労働力のみでは決してないのである。奴らは、もちろん労働力を収奪しているが、単にそれだけではなくて、労働者のもつ全力量を収奪しているものであり、全力量に寄生しているものであり、そしてその為には彼らの全人格を、全人間を管理しているのである。実際の話が、きょうびの資本家は労働者の創意工夫、精神力の一切を動員して、利潤を挙げているではないか。日経連も経団連も同友会も、全ゆる機会に、至る処で、労働者の肉体的力量のみならず、精神的力量をも、銭に換えるんだという事を正直に告白している。これが、賃金体系のレベルで現れると職務給という事になるのだ。又、このことを、つまり、労働力人間が全人格的に収奪され、全人間的に管理されるに至ったというこの事を、社会的なレベルで考えるなら、どういうことになるであろうか。これが即ち、いわゆる社会問題の同時乱発的な噴出という事だ。わけの分らん矛盾がバンバン出るといふことなんだ。

かつて古典的な資本主義の時代ではどうであったか。一切の矛盾は労働力の搾取関係につまり、資本Ⅱ賃労働関係に集約された。一切の社会問題といわれるものは、究極の処、貧困の問題であった。国家の政治秩序に関する問題も、社会秩序に関する問題も、労働力搾取の問題にこそ単純に還元されたという事、この事は、即ち労働力の直接的生産過程の矛盾がそれだけ集中力・社会的総括力をもっていたということ物を語っているのだ。かつての資本主義矛盾は、直接的生産過程

においてバツグンのスタミナとエネルギーをもっていったのだ。だからこそこの直接的生産過程において、その矛盾を根拠にして、結集したところの組織形態、つまり労働組合は、「革命の学校」「共産主義の学校」たり得たのであった。

ところが、一九世紀の末以来、資本主義はみずから過剰資本化して、その寄生性・腐朽性を増大させ、これをベニツクとして対象化するに至るのであった。

資本は、当然、労働に寄生することなくして、一刻も存命できないのだが、この段階に至ると、みずからの寄生すべき社会的労働力に気をつかわなければならなくなる。社会的労働力商品人間が、資本の過剰化と腐朽性の矛盾に対して敵対的に挑み、その解決を要求するのを、その自在な成熟——階級への成熟、階級の形成——を、そのまま許すわけにはゆかなくなる。奴らブルジョアジーは、資本主義支配の中核部分である直接的生産過程でゼネストか何かやられると、かなわんだ。それは個別企業の運命のみならず国家の存亡に迄関わるからだ。だとすると、直接的生産過程に集中累積する矛盾から、そのスタミナ

・エネルギーを抜き出して限界領域に投げ捨てないわけにはいかないのだ。

中核に一切が集中する構造を回避しなくてはならぬのだ。矛盾は、いう迄もなく、消えて無くなるわけではないから、その限界部分で、つまり全社会的領域に於て対象化することになる。これ即ちいわゆる社会問題の同時乱発的な激成に他ならない。それは、資本主義中核矛盾の去勢と解体の結果であるが、而し、事態は決して奴らにとっても甘くはない。かつての矛盾は、資本Ⅱ賃労働の直接的生産過程に於ける敵対関係としてのみ単純に一樣に発現したのだが、我々の資本主義の矛盾は、一樣にはなくて多様且つ全面的に、直接的生産過程のみならず、全社会領域に於て、自己を表現する様になった。矛盾の全面展開である。矛盾の全人格把握である。階級社会の最終段階としての資本主義の破局的局面に今日が位置しているということの中味は、こういうことだ。奴らブルジョアジーが資本主義の矛盾を暖めてこの様な局面に迄成熟させてくれたのだ。翻って考えて見ると、この様な矛盾の全社会的対象化と全人格的深化ということが、このことが全人民

構造

九月号・一六〇円

第二次大戦後の日本社会の展開

運命共同体としての日・韓・台……………野沢史朗
 第二次「韓国併合」の進展……………玉城 素
 新日本帝国と七〇年代主体……………いいたも
 日本ナショナリズムとアジア……………新島淳良
 いま、われわれに何が必要か……………神津 陽
 マルクス主義運動における……………湯浅起男
 カリスマと官僚制……………D・ゲラン 江口幹訳
 フランス革命の代理性……………D・ゲラン 江口幹訳
 人間活動論による芸術論の再構成……………大久保そりや
 十月号 特集 出入国管理体制

経済構造社
 東京都中央区京橋2-4
 (272)2659 振替東京58854

的な武装反乱の物質的社会的根拠であったのだ。
だとすれば、資本主義の中核矛盾の姿態転換も、我々にとって予定の筋道だと云わねばならん。

ウンヤと思うんやったら、きょうび流行りの公害を考えて見よ。色々公害はあるけれども、そのうちの二、三について云うなら、先ず光化学公害はどうか。光化学公害の被害者は、エエしの子も、ワルイしの子も、平等に含んでいる。教育公害の場合もそうだ。エエしの子もワルイしの子も平等に悪質な教育を受け、運悪く封鎖でも起これば、これ又平等にその悪質な教育を受けることが出来ない。又、交通公害を考えても、本を持っている奴も持っていない奴も、平等に排気ガスのお世話になり、ほぼ平等に交通の不便に見舞われている。又、直接染料の生産と加工の工程を考えても、発ガン物質（ベンジジンとβナフチルアミン）の殺人的威力は、全ゆる労働者に平等にふりかかる。かつて、資本主義は、資本主義の根拠である私有財産は、「私」の将来の生活とその幸せを保障してくれた。資本主義とそのイデオロギーにとって、「私」「私有財産」、したがって、そのイデオロギー形態としての「エゴイズム」は、死命を制する重要性をもっていた。しかし、既に見た様に、公害を初め全ゆる社会問題は「私」と「私」のもの。「私の意識」の意味を無にしつつあるのだ。資本主義は自らの物質的思想的根拠に迄手をかけ、かくて自らの墓穴を掘っているのだ。我々は、ここまで矛盾を全面的に展開し成熟させてくれたブルジョアジー諸君に感謝し、この全社会的全面的矛盾をこの手に把み切る事を考えなければならぬ。捉われざる形態を考えなければならぬ。
六〇年代には、否、現在でも、労働者本隊と突出部隊という図式が

workersは、冗談ではないのだ。

だから、こうだ。資本主義の中核矛盾の姿態転換によって、矛盾は全社会的に対象化され、全人格的に深化され、かくして全人民武装反乱の社会的物質的基盤を形成するのだが、このことが同時に、人格的組織的にいっても、ブルジョアジーの社会的組織性の枠を越えて、社会的組織性を形成し獲得する可能性と必然性を、示唆しているのだ、と考へたいと思う。

余す時間が殆んど残されていないにもかかわらず、第四の点の報告が、ぜんぜん手をつけられないままの状態である。つまり、「全世界を獲得するために……」を合言葉にアジア反革命共栄圏の構築を志向する敵の七〇年代の総路線はすでに確定されたと思われるが、この朝鮮半島からマラッカ迄を「日本」にしようとする路線に対して、我々がどのような戦略準備をもって挑むのかということ、またこうした総路線が日本帝国主義心臓部にハネ返った場合に、日本の階級関係・権力構造はどういうことになるのかということ、こうした点についてはこの報告では触れていない。もうソソロロ報告を終りにせねばならぬ

ある。この幻想的な図式は、上の様に考えてみると、何としても止めにしなければならぬ。暴力でドンドン石を投げ、棒を振り、火焰ビンを投げて突出する学生・反戦青年委員会の諸君が、頑張れば、労働者本隊は、立ち上がるということになっていた。しかし、労働者本隊は立ち上らなかつたではないか。反戦派労働運動があるではないか、という奴はウンツキか、社会的諸事象を総体として見る事の出来ないメクラである。全民労働を見てみよ。敵ではないか。全民労働を最右派とする戦線統一派と日本生産性本部の翼賛的右翼的団結は、既に怒濤の進撃を開始し、総評のいわゆる左翼、バネをも呑み尽くそうとしているのではないか。このことが反戦青年委員会の青息吐息の事態を必然たらしめているのである。帝国主義のオコボレ頂戴部隊の圧倒的な進撃である。どうするのだ、お前は。労働者本隊幻想の中で、今になっても駄眠を貪るといふのか。

だからして、我々は、カスみたいな幻想でその日暮しをするのではなくて、生身の矛盾のある処へ赴き、矛盾を動かすことを学ばなければならぬ。限界領域の矛盾と結合し、そのエネルギーを直接的生産過程の中核矛盾の領域へ吹き返さなければならぬ。何が何でも労働者という風に考えるのではなくて、戦闘力量をもっている部分を発見し、これと結合せねばならぬ。結合の形態とその術を習得せねばならぬのだ。ブルジョアジーの社会が決めたジャンルを越え、その棚を踏み倒して、ヤル力量をもっている奴の処へいって結合するのだ。ヤル力量をもっているはずや、という話はもうアカンで。労働者本隊はヤルハズやなんて、アカンで。ヤラヘンで。戦前から一貫してオコボレで大きくなってきたんやないか。アメリカの赤軍派のいう、Huck the

いのだが、ただ我々の視点を示唆するなら、この第四の問題には、いわゆるファシズム論・過去の歴史としてのファシズム規定から解放された地平に立って、「現代日本ファシズム」を考察することにあると思う。過去の歴史的経験に学びつつも、それに縛りあげられて固定されるようではだめだ。表現はよくないが、すでに現代日本ファシズムは国境を超えてアジアを見、かつその同じ眼で日本国内を見つつ、国民的生産力・精神力・戦闘力の結集政策・動員政策を展開しているではないか。もはや「平和と民主主義とよりよき生活」の六〇年代型市民社会共同幻想は崩壊していることを銘記せねばならぬのだ。

最後に、いちばんはじめに確認したこと、つまり、革命戦争は必ず起るし、革命派は必ず勝利するのだということ、現代は我々にとって一切の自然成長的怠惰を許容しない未曾有の時代だということ、だからこそ現在の青年ヘーゲル派と第二インターの体質の愈着は断ち切り、粉碎されなければならないのだということ、以上の三点を再度確認し、報告を終りたいと思います。

津村 喬 著

魂にふれる革命

B6上製 680円

- 第一部 方法としての「第三世界」
- 第二部 魂にふれる革命
- 第三部 日本文化大革命への模索

本書は自注出版です。左記取扱店でお求めになるか、直接ライン出版へお申し込み下さい。なお送料は当方で負担いたします。
取扱店 仙台・八重洲書房/神戸・ウニタ/信山社/神田・東京堂/早稲田/谷書房/早稲田・文蔵堂/本郷・鈴木書店/明大前・坂井書店/池袋・芳林堂/吉祥寺ウニタ/名古屋・ちくま正文館/名古屋・十月書房/京都・ふたば書房/大阪ウニタ

ライン出版

東京都千代田区三崎町2-12-5マルサンビル
電話262-1682 振替東京150984